

# 出島和蘭商館跡の史跡整備と活用

## －復元整備20年の歴史と展開－

山口 美由紀（長崎市文化観光部出島復元整備室専門官）

### 1. はじめに

国指定史跡出島和蘭商館跡には、現在16棟の江戸時代の復元建物が建ち並び、往時の町並みの一部が再現されている。場内には、国内外からの観光客が訪れ、江戸時代に海外との窓口としての役目を担った出島を、等身大で体感いただいている。平成29年11月には、対岸地の江戸町から出島に渡る橋も完成し、周囲は埋め立てられているものの、海に浮かぶ孤立した島であった姿を、さらに印象深く伝えられる施設となった。

これまでの出島の復元整備によって、江戸時代、海外交流の拠点であった出島の価値を、分かりやすく視覚化することが可能となったが、観光地化も進み、現在、出島は文化観光教育施設として節目の時期を迎えていると言えよう（図1）。

本稿では、本格的な事業着手から20年以上を経た、史跡出島和蘭商館跡の復元整備の歴史と、これまでの活用事例について紹介する。さらに復元整備事業の進捗によって変わっていく出島の文化観光教育施設としての役割と抱える問題点、今後の展開について、報告を行う。

### 2. 長崎の文化財

#### (1) 長崎市の概要

長崎市は、東アジアに近い九州の西端、長崎県の南部に位置し、長崎半島から西彼杵半島の一部を占める。五島灘、橘湾、大村湾に面し、天然の良港に恵まれる一方、市域の背骨を通るように山稜が位置

し、標高590mの八郎岳を最高点とする300mから400m級の山々が連なり、急峻で平地が少ない地形である。編入合併により拡張を続け、現在では東西約42km、南北約46kmに達している。江戸時代には西洋に開かれた唯一の貿易・文化の窓口として、近代以降は造船業を主として栄え、国際社会の中で重要な役割を果たしてきた。昭和20年（1945）には原子爆弾による惨禍を被ったが、戦後は、核兵器廃絶と世界恒久平和を訴える国際平和文化都市としての役割を果たしている。人口総数は423,722人（平成30年5月末統計）、平成29年度の一般会計予算は約2,096億7千万円で、そのうち文化財関連予算は約12億2千万円である<sup>1)</sup>。

#### (2) 文化財行政の組織について

長崎市の文化財担当部局は、平成20年に組織改変が行われ、長崎市教育委員会から長崎市文化観光部へ移行し、現在に至る。文化財全般を所管とする文化財課及び出島の史跡整備を担当する出島復元整備室が、文化観光部へ移動となった。この移動に際し、これまで観光部局が担当していた出島の維持、運営についても、出島復元整備室にて一元的に行うこととなり、史跡の整備事業とあわせて、施設の維持、運営を受け持つこととなった。

このほか、世界遺産への取り組みが全国的に推進されるなか、本市にも市長部局に世界遺産推進室が新設され、平成27年7月には長崎市に所在する構成資産を含む「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産登録された。また、本年6月には、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が登録されたことは、

記憶に新しい。

### (3) 近年の文化財に関する動向

先述した2件の世界遺産について、その構成資産の一部に長崎市の歴史的建造物が記載された。「明治日本の産業革命遺産」には、小菅修船場跡、高島炭坑北溪井坑跡、端島炭坑、旧グラバー住宅、ジャイアント・カンチレバークレーン、旧木型場などが含まれる。なかでも端島炭坑は急激に知名度が上がり、専用船による軍艦島（端島）上陸ツアーが人気を博している。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」については、潜伏集落であった「外海の出津集落」・「外海の大野集落」、信徒発見の舞台となった「大浦天主堂」の3つの構成資産が本市に所在する。

また、近年、長崎原爆関連遺跡の遺構保護についても、その重要性から史跡指定の動きが取られ、平成28年10月に「長崎原爆遺跡」として国の史跡に指定された。本遺跡は、昭和20年（1945）8月9日に長崎に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡で、爆心地、被爆校舎である旧城山国民学校校舎、崖下の小川に滑落した浦上天主堂旧鐘楼、爆風により傾いた旧長崎医科大学門柱、爆風で一本柱となった山王神社二の鳥居から構成されている。

このほか、長崎市内における大規模な遺跡調査として、小学校統廃合事業に伴う長崎養生所跡地の発掘調査や長崎市新庁舎建設に伴う魚の町遺跡の調査

が挙げられる。長崎養生所は、文久元年（1861）小島郷の丘に、日本最初の西洋式近代病院として建設された養生所の病棟と医学所からなる。オランダ海軍軍医ポンペらオランダ人による設計に基づいて建設され、慶応元年（1865）に養生所と医学所は統合されて精得館と改称されて、化学教室である分析研究所も新設された。再開発に伴う建設に先立って行われた発掘調査で、養生所の北棟の石垣や建物基礎などが見つかり、平成29年に市の史跡として指定された。

魚の町遺跡は、平成29年から本格的な発掘調査が行われ、井戸、建物礎石などの町屋跡や道路遺構が検出され、現在も調査が続けられている。

## 3. 出島の歴史と復元整備事業

### (1) 出島の歴史

史跡出島和蘭商館跡は、長崎市の中心部を流れる中島川の河口に位置する。寛永11年（1634）、江戸幕府は、キリスト教の布教を禁止し、日本人との接触を断つためにポルトガル人の隔離政策をとり、長崎の有力な町人25名の出資によって、長崎の岬の突端を埋め立て、人工の島“出島”を築いた。寛永13年（1636）に完成したこの島の面積は約1万5千㎡で、特徴的な扇の形をしていた。

築造当初はポルトガル人が入居したが、寛永16年（1639）にポルトガル船の来航が禁止されると、ポ



図1 出島全景 平成30年度撮影



ルトガル人は出島から追放され、出島は無人の島となった。その後、寛永18年（1641）にオランダ東インド会社の拠点の一つとして平戸にあったオランダ商館が、出島に移転された。これ以降、安政の開国に至るまでの218年間にわたり、出島は西欧に開かれた唯一の窓口として、日本の近代化に大きな役割を果たした。

出島は、オランダのアジアを中心とした貿易活動拠点の一つであり、そのため広くヨーロッパ、アジアの文物が行き交う場所であった。そこでは商館員と日本人の自由な出入りが禁止されるなか、商館員はこの閉ざされた島で日々の暮らしを営み、限られたなかア蘭陀通詞や蘭学者などの日本人と交流を持った。また出島は、江戸幕府にとっては海外の情報を入手する窓口であり、そこを介して西洋の進んだ学問や技術が伝えられた。さらに日本の文物や情報も広く西洋に伝えられ、出島は日本と西洋、アジアにおける国際交流の場としての役割を担った。

幕末、我が国が開国へ向かう中、安政6年（1859）に出島のオランダ商館は廃止され、オランダ領事館となり、慶応2年（1866）には外国人居留地に編入され、新たな国際貿易の場へと変化した。明治になると長崎港を近代的な港へと整備するため、大掛かりな港湾改良工事が計画されるなか、出島とその周辺にも改修が及び、明治26年（1893）に完成した第1期港湾改良工事によって、出島の北側が約18m削られ、東側は陸続きとなった。明治37年（1904）には、第2期港湾改良工事が完成し、出島の南側は全面的に埋め立てられ、内陸化し、島としての形状を完全に失った。

しかしながら、出島が有する特異な歴史性が評価され、大正11年（1922）出島和蘭商館跡として国指定史跡に指定され、現在に至る。

## （2）復元整備事業

長崎市は、街に埋もれ、失われた往時の出島を現代に甦らせるため、昭和26年（1951）より整備事業に着手した。昭和27年（1952）以来、史跡内民有地の公有化が進められ、また昭和32年（1957）度まで

に石造倉庫1棟の復元、庭園の整備が行われた。昭和48年（1973）～51年（1976）にはさらに石造倉庫1棟を復元、現存する洋館「旧内外クラブ」を改修して、出島資料館とし、庭園には出島の模型を設置した。昭和52年（1977）～54年（1979）には、明治時代に建築された洋館「旧出島神学校」の半解体修理事業が実施された。

昭和53年（1978）、長崎市は、長崎市出島史跡整備審議会を設置し、史跡整備の方針について検討を行った。委員には、日蘭交流史の専門家や長崎の政財界における有識者が選ばれ、復元の基本方針がまとめられた。この中で、19世紀初頭の出島を完全復元するという方針が示され、現在も復元整備事業の大きな指針となっている。

その後、第2次出島史跡整備審議会が設置され、平成8年には審議会の答申を得て、具体的な建造物の復元を打ち出した短中期計画と、出島の顕在化を基軸とした長期計画からなる復元整備事業計画がまとめられた<sup>2)</sup>。

短中期計画は、25棟の江戸時代の復元建物を建築する計画である（図2）。出島の建造物復元時期については、古絵図が比較的多く残され、オランダに現存する往時の建物模型が1820年代頃であることからこの時期に設定されている。商館医としてシーボルトが来日していた時期（1823-1828）でもあり、よく知られた出島のイメージが浮かぶ。この計画では出島の西側から順に建造物の復元を行い、東側では今も現存する明治期以降に建てられた洋館群も併せて活用を行う。

本計画に基づき整備事業を遂行し、平成12年4月

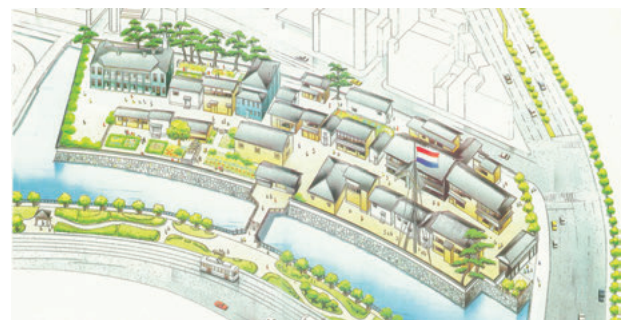


図2 短中期復元整備計画予想図

に出島西側に5棟の建造物が完成し、平成18年春には続く5棟の建造物が完成した。平成28年10月に  
出島中央部に位置する6棟の建造物の復元が完了し、  
合わせて16棟の建物が建ち並び、往時の町並みを体  
感いただくことができるようになった。

また、失われた扇形の出島の顕在化を行なうため、  
出島の南側及び西側の一部に堀を作り、護岸石垣の  
整備を行なっている。平成29年11月には、出島と長  
崎の町を結ぶ唯一の出入り口であった表門に架かる  
新しい橋「出島表門橋」が完成し、水面を渡り、往  
時の動線が出島に入場することが可能となった。

長期計画は、出島周辺の交通網の整備、中島川、  
銅座川の流路の変更を行い、出島の四方を水面とし、  
19世紀初頭の海に浮かぶ出島を再現する計画であ  
る。その計画実現を見据え、平成28年度にその指針  
となる史跡出島和蘭商館跡保存活用計画を策定し  
た。

## 4. 復元建物と護岸整備

### (1) 建造物の復元

復元整備事業の推進にあたっては、出島敷地内の  
用地の公有化が、優先的かつ重要な課題の一つで  
あった。もともと出島は長崎の町人25名の出資によ  
り築造された築島で、その後もポルトガル人、オラ  
ンダ人に対して、借地料を設定し、町人が出島家主  
として常に関わりをもって運営されてきた歴史的経  
緯があった。オランダ商館が廃止され、居留地になっ  
て以降も、民間人がそれぞれ土地を所有することか

ら、出島はまさに長崎の町人が権利を有する島なの  
であった。そのなかで史跡整備に取り組むにあたり、  
その趣旨を理解いただき、用地買収が進められた。  
用地の公有化は昭和27年（1952）に始まり、半世紀  
を経て平成13年に敷地内の全ての用地の買収が完了  
した。

出島の第Ⅰ期事業は、効果的な整備が出来ること  
を考え、この用地買収においてまとまった敷地面積  
を確保できた西側から計画された。復元建物は、ヘ  
トル部屋、一番船頭部屋、一番蔵、二番蔵、料理  
部屋の5棟で、平成8年から発掘調査を始め、その  
後建物の基本設計、実施設計を行い、平成12年3月  
に完成した。平成12年は日蘭修好400周年を記念す  
る節目の年であったため、復元建物の完成を祝い、  
あわせて様々なイベントが行われた。

これらの建物は、発掘調査成果、市内に残る類例  
建物の調査、幕末期の古写真、オランダに現存する  
模型、平面図、文献史料、絵画資料などにに基づき、  
復元されている。このうち、模型については、約30  
分の1の縮尺の『プロムホフの出島模型』（ライデ  
ン国立民族学博物館所蔵）が建物の外観、建具、内  
装などの参考となった<sup>3)</sup>。

その後連続した町並みの整備を目指し、平成13年  
から、隣接地を計画地とした第Ⅱ期事業に着手した。  
第Ⅱ期には、カピタン部屋、乙名部屋、三番蔵、拝  
礼筆者蘭人部屋、水門の5棟が復元された。商館長  
の居宅であったカピタン部屋は、出島の中心となる  
施設で、規模も最大の建物であったため、間取りや



図3 出島の通り 復元された江戸期の町並み



図4 出島中央部発掘調査地点全景



建具の意匠等、慎重な検討を重ねた。また内装や室内の空間再現にも取り組み、往時の生活様式や日々のエピソードなどに留意し、家具、調度品の配置を行い、一般に公開している。

続く第Ⅲ期事業には、平成22年から着手し、出島中央部に位置する銅蔵、組頭部屋、乙名詰所、筆者蘭人部屋、十四番蔵、十六番蔵の6棟が平成28年10月に完成した。現在、これまでの復元建物と合わせて計16棟の19世紀初頭の復元建物が通りに建ち並び、往時の町並みが形成されている（図3）。

これらの復元整備事業によって、出島の西側から中央部にかけて広範囲な発掘調査が行われ、これまでにオランダ人住居、日本人役人の詰所、貿易品を納める蔵などの建物の礎石が検出されている。また、上水道、下水道に関する水樋や溝の遺構、便槽跡、廃棄土坑など、生活の様子が分かる遺構群も確認された（図4）。遺物はこれまでに約70万点が出土し、その内訳は国産の近世陶磁器を中心として、中国、西洋、東南アジアの舶載陶磁器、土器や瓦、練瓦、クレーパイプ、ガラス製品、動物遺体や貝殻など、多岐に渡る<sup>4)</sup>。

## （2）建造物の復元意義

出島には、往時のオランダ商館時代の建物は現存しない。そのような中、復元された建物の完成によって、来場者は外観を眺め、建物内部に入り、往時の人々が集い過ごした空間を体感することが出来る。これらは、より深く出島を理解する一助となる。

出島の建造物復元は、その復元過程の各段階において、様々な意義を持つと考える。設計段階では、歴史的な検証によって、出島の研究が促進され、新たな出島像が明らかとなる。これまでの復元事業においても、新史料の発見、復元を契機とした発掘調査の実施による調査成果の蓄積などが具体的に見られた。また、本来の復元設計においても、出島に存在した建造物のイメージが具現化する成果となる。一般に、出島オランダ商館の建造物は和風建築を基準とした二階建ての住居が多く、一階は倉庫、二階が居住スペースとして利用されたと言われている。

復元設計の実施により、このような概説的な内容から、建物間の格の違いや、室内の間取り、動線から見えてくる用途など、具体的な建物の構造や役割が推察され、出島の機能を理解するうえで重要な要素となる。

建築工事の過程においては、伝統的な建築技術の紹介とその継承が行われる。古建築の工事手法は、ときに大変手間がかかるものであるが、その過程を踏むことによって、価値のある建造物が完成する。出島ではすでに数棟の土蔵の復元を行っているが、時期を選んで材料を調達し、土作りに時間を要し、壁の芯となる小舞を組み、小舞搔きののち、荒打ちを行い、その後、土を付け乾燥する作業を繰り返す根気のいる作業が行われている。

整備工事の過程で繰り返される伝統的な技法の継承は、復元建物が完成した数年のちに、補修を行う際にも必要とされるものであり、また次の整備事業を行う際にも、欠かせない技術力であるため、引き続き伝統的な建築技術を継承する体制作りが重要となる。

また、和洋が混在する出島ならではの意匠も、特徴的な構造として再現されている。カピタン部屋やヘトル部屋の窓の手摺の欄干は、洋風のデザインでありながら、立体的な構造物ではなく、板状の仕上げとなっている。これは、洋風の手摺デザインをモチーフとして、日本人大工が見よう見真似であつらえたためと解釈され、洋風建築にも、和風建築にも見られない独特な仕上がりとなっている。これらの欄干に塗布されているペンキや窓に用いられた板ガラスも、江戸時代の日本では一般的な建築材料ではなく、特別に海外から搬入された材料であり、建物を印象的なものとしている<sup>5)</sup>。このような西洋風の意匠や材料の使用から、日本国内の建築技術のみならず、西洋の古建築に用いられた建材にも通じる必要が生じ、オランダの学芸員や技術者との交流、連携も生まれた。

## （3）護岸石垣の整備

出島が扇形の島であった姿を視覚化する顕在化事



図5 南側護岸石垣整備後の状況

業が計画され、出島の西側及び南側護岸石垣の一部を顕わにし、修復する整備工事が行われた。

平成9年に実施した出島西側における護岸石垣の発掘調査では、築造当初期の護岸石垣と荷揚げ場の拡幅を示す石垣が確認され、現在その一部が公開されている。

平成15年度より約131mに渡り実施した南側護岸石垣の調査では、遺存状況が良い地点で石垣総高約3.4m、11段の石積みが発見された。修復工事に伴う解体調査の結果とあわせ、石積技法や使用された石材の違いなどを検討、築造当初から残る石垣とその上部にみられる後世に積み直しが行われた石垣が確認出来た。また、修復工事を念頭に置いた石材・石質調査、石積み技法・加工方法の確認、全体的な石積勾配・石積みラインの線形の検討などを行い、護岸石垣に関する特徴的な要素を捉えた<sup>6)</sup>。

これらの調査成果に基づき、南側及び西側護岸石垣の修復整備を行った。検出した状況のとおり石垣の積み直しを行うことを基本とし、さらに上段の石垣が欠損している箇所については、既存の石垣を手本としながら、新補材による復元を実施した。石垣は往時から今に残された遺跡の一部であり、出島和蘭商館時代の遺構が地表に残されていない現状において本物の遺構であるため、調査から整備にかけて出島の石垣がもつ特徴を損なうことがないように十分な配慮を行った。現在、出島の南側外周に歩道を設け、整備された石垣を安全に観覧出来るようにし、石垣の上には、高さ9尺の練塀を設置し、囲われた



図6 カピタン部屋 大広間の再現

島を再現している。これらの整備によって、歩道、車道上から、出島の境界ラインを視覚化することが可能となり、来場者に、往時は閉じられた空間であったことを強く認識させる効果が上がっている(図5)。

## 5. 出島の活用事例

### (1) 建物の展示公開

これまでに復元を行った建物については、内部空間が明確な建物は、特に復元に力を入れ、内外観あわせて往時の姿を甦らせるべく設計を行った(図6)。内部空間が不明な建物については、外観は復元を行い、内部は出島の歴史や貿易についての展示室としての整備を行っている。また、出島内に現存する幕末から明治時代の建物群については、映像シアターや出土遺物の展示室等のほか、休憩室やレストランなど、交流や憩いのスペースとしての活用をはかっている。

これら施設の開場時間は、午前8時～午後9時までで、特に夜間のライトアップを実施後、開場時間が延長され、観光施設としての利用が促されている。

### (2) 魅力発信イベントの実施

年間約40万人が来場する出島であるが、平成29年は年間50万人の来場者を超え、国内外の観光客、修学旅行生を中心に多くの見学者で賑わっている。

そのような中、リピーターや市民の来場を促し、来場者の満足度向上を目的として、春に「オランダフェスティバル(日本とオランダの友好を祝したイ



ベント)」、夏と冬に「感激の出島(西洋音楽と演劇)」、秋には「蔵出しフェスタ(出島ゆかりの食のイベント)」を、市主催事業として実施している。また、民間市民団体によって企画される出島ゆかりの食やデザイン、クラフト、音楽などをテーマとしたイベントも行われ、市民が史跡に愛着を持ち、かつ出島の多面的な要素を周知する機会となっている。このほか、長崎の秋の大祭長崎くんちにおいて、地元自治会が奉納を行う踊町の当番に当たる年には、出島も庭見世、奉納踊り会場となり、賑わいに華を添える。長崎くんちは、江戸時代にも阿蘭陀人が、大波止お旅所にて奉納踊りの見物を行っていた史実が残り、今日まで変わらず、出島と縁のある祭礼であると言えよう。

また、昨年11月に完成し、一般供用している出島表門橋については、橋の架設を行った昨年2月及び完成セレモニーに際し、関係者や市民と、その瞬間を共有しようという趣旨から、広報誌等を通じて、作業や式典の公開を行い、大いに盛り上がったところである(図7)。この架橋事業には、地元の経済界や市民からの寄付による出島復元整備基金が用いられている。本基金は、平成8年10月地元経済界を中心に「出島復元募金活動推進委員会」が設立され、平成12年12月までに10億円を目標に募金活動を行ったものである。目標額は達成され、架橋事業にはその半分にあたる5億円が財源として用いられた。このことから出島表門橋は、長崎市民及び長崎に縁のある人々とともに造り上げられた橋と言えよう。



図7 出島表門橋の架橋  
多くの関係者、市民が見守る中、行われた  
(NBC長崎提供)

## 6. 課題と問題点

### (1) 組織について

本市は、平成20年という比較的早い時期に、文化財行政が、教育委員会から首長部局へ移管された自治体であると思う。このような組織の改変、業務の移管について、近年そのメリット、デメリットを問う照会が多い。都市の個性が問われる近年、大規模な史跡整備は、首長部局の中で、その自治体の歴史と文化を象徴する遺跡として、施策の軸に置かれることも多い。積極的な史跡の活用という点では、首長部局のプロジェクトとして、史跡の整備や活用が推進されるという利点が挙げられる。

しかしながら、政権や政策の影響を受けず、長いスパンで取り組まれる課題や整備は、史跡整備計画や保存管理計画に則り、継続的に進められるものである。推進する力と継続する力、この二つを有した組織であれば、史跡の整備活用と運営は、目標を見失わずに進めることができると考える。

さらに現代は、政策の意義の明文化、目標指数などの達成率などによって、文化財行政が評価される時代である。このため、本質的な議論よりも、より早く目に見える成果が求められるため、2~3年単位での目標設定が必須とされる。この単位を超えて、長期的な視点に立ち行われる史跡の保存整備は、骨子に基づき、継続的に実施されるべきであるため、自治体の<sup>じりき</sup>地力、耐久力が試されるところであろう。

### (2) 維持管理について

平成11年に完成し、翌12年から一般公開しているヘトル部屋等の復元建物は、平成31年に築20年目を迎えることとなる。江戸時代の木造建築である出島の建物は、日々多くの来場者が入室し、経年劣化が見られ、メンテナンスが必要な時節となっている。屋根の漆喰部分の剥落、漆喰と土壁の亀裂、塗料の剥落、板材の磨耗、破損、カビの発生等が具体的な事例として列挙される。

今後も永続的にこの維持管理に伴う修復作業は続くことになり、建物の維持には相当な費用がかかる

ことが予想される。

オリジナルの古建築の保存については、このような修理にかかる費用は、管理者において予想される場所であるが、復元建物においても同種の経費がかかることについて、現状どれほど関係者に共有されているものであろうか。公開施設として、本来の用途よりもさらに使用頻度が高まり、耐久性が求められるなか、往時の工法を用いて復元される建物群について、効果的な維持管理の手法について、議論を交わす時期が来ているのではないかと考える。

例えば建築資材の耐久度、コスト面の効率性など、数十年を経た復元建造物や重要文化財の修理の記録などから、検証が可能である。また、日々、材料や工法も進化しているため、新規材料の有益性についても、試行された結果等を共有する必要がある。

また、古建築の修復は専門的な知識や技術を必要とするところであるが、地域住民が専門家の指導を受けながら、文化財に触れ、その一部をともに作る過程が将来的な文化財の保護につながるという長期的な視点も必要であろう。地元の市民や小中学生を巻き込み、みんなで息長く史跡を作り続けていくことが、理想的な姿ではないかと思う。このため、文化財行政が地域のコミュニティや地域の教育機関とのネットワーク作りを行うことが、まずは端緒となるのではないだろうか。

### (3) 枠組みの変化と変わらない遺跡の価値

現在はSNSの普及によって、地方自治体であっても遺跡の情報については国際的に様々なアプローチが可能となり、広く共有できる時代である。このため、遺跡を取り巻く環境は大きく変化し、遺跡に関わる組織も多岐に亘り、複雑化している。

多様な価値観が形成されるなか、遺跡としての価値付けを視覚化、明文化する作業が求められ、さらにブランド化する方法が模索される。遺跡の価値を疑わない者にとっては、これらの一連の作業はある部分では不必要ではと感じる場合もあるが、抱える遺跡が埋もれないようにするためには力を入れざるを得ない。

その打ち出し方が、時代に合う場合には注目され、そうでない場合には、時節を待たなければならない。そのサイクルは次第に早くなってきているが、そのような中で、1年もしくは数か月で飽きられることと、長きに亘り評価され続けることが見えつつあるのではないだろうか。

学術的には、他の遺跡との比較によってその特徴が浮き彫りとなり、関連する遺跡群を形成することによって、その歴史的な変遷を知ることができ、我が国の成り立ちや構造の中で、位置付けを行うことが可能となる。

結果的には、これまでに行われてきた遺跡の分類、整理を踏襲し、明解なキーワードを設定し、グルーピングを行い、現代的な手法で視覚化することで、より多くの人々の心に留まる遺跡となるのではないだろうか。

長年、著者が史跡整備を担当した出島は、復元整備事業の永続性が注目され今日に至る。今後も、整備事業の継続によって、出島は昔の人が生きた過去の遺跡という評価にあわせて、現在の人々によって生かされた空間としても歴史を重ねていくであろう。壮大な整備事業が将来に受け継がれ、未来の出島へとつながっていく。過去の人々から現代の私たちへ、そして未来の子ども達へ、壮大なバトンリレーが繰り返される。

### 【補註および参考文献】

- 1) 長崎市HPより引用。
- 2) 長崎市 1996「史跡出島和蘭商館跡復元整備計画書」
- 3) 長崎市教育委員会 2001『国指定史跡 出島和蘭商館跡 西側5棟建造物復元工事報告書』
- 4) 長崎市教育委員会 2018『国指定史跡 出島和蘭商館跡 銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』
- 5) 山口美由紀 2016「国指定史跡 出島和蘭商館跡における歴史的建造物の復元」『月刊文化財』1月号628号 p.p.31-38
- 6) 長崎市教育委員会 2010『国指定史跡 出島和蘭商館跡 南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書』